

# スポーツの力

個と集団の力が、感動を呼び、時代を動かす。  
子どもたちの夢となる。イノベーションを生む。  
日体大はスポーツの力を発信し続ける。



## Special Contents



### オリンピック・ パラリンピックの年に 平和と前を向く力を

▷バリオリンピック・パラリンピックの年を迎えた。コロナ禍を乗り越え、スポーツの感動と喜びを存分に謳歌できる一年となることを願う。しかし、世界には紛争に苦しむ人々があり、国内では年初に大きな災害が発生し、多くの人々が命を落とし、また不自由な暮らしを強いられている。スポーツによって平和を進め、困難に対しても前を向く力を与えてくれることを期待してやまない。

▷スポーツがもつ力は多様である。今号では、本学がスポーツ庁より受託した体育授業の革新的なプロジェクトを紹介する。体育と数学や情報を融合させた新しい試みである。また、スポーツの持つポテンシャルをビジネスや社会課題の解決に活かすスポーツマネジメント学部との連携、JICA海外協力隊の活動との連携など、スポーツは大きな可能性を秘めており、本学はその先導的な役割を担っている。

▷「命の授業」の報告では、スポーツの中心に「人」があることをあらためて実感する。五輪の年に、「人を活かす」スポーツについて考え、実践していきたい。

学報NITTAIDAI (ニツタイダイ) 75号  
発行日●2024年2月6日  
発行●日本体育大学広報課  
TEL 03-5706-0948  
FAX 03-5706-0922  
<https://www.nittai.ac.jp/>  
制作協力●(株)図書出版

03

スポーツ庁・令和の日本型学校体育構築支援事業  
《GIGAスクール環境下における体育授業の充実》

### 体育授業における「身体活動量と 身体活動強度の見える化」の効果検証

体育学部 大石 健二 教授

09

今と未来をリアルに感じる大学の学び

### スポーツの価値を最大化する スポーツマネジメント学

限りあるリソースで新たな価値を創造し  
あらゆる課題や問題を解決するビジネススキル  
スポーツマネジメント学部 横田 匡俊 教授

13

世界へ踏み出すその一歩を後押しする

### JICA海外協力隊セミナー

公益社団法人 青年海外協力協会  
(JAPAN OVERSEAS COOPERATIVE ASSOCIATION)  
グローバル推進グループ 協力隊募集支援 総括主任 原 浩治 氏  
JICA海外協力隊(体育隊員)経験者 体育学部卒 三上 るり香 氏

15

令和5(2023)年度

### 学校・部活動における 重大事件・事故から学ぶ研修会

～日本体育大学が「超本気」で取り組み続けている「命の授業」～  
スポーツ文化学部 南部 さおり 教授

17

Power of Sports

「第60回体育研究発表実演会」を開催

18

Over the Top

第56回日体フェスティバル2023  
日体大の頂点を極めた3日間

19

大学からのお知らせ

令和6年能登半島地震の防災を受けて

## news & topics

富士山女子駅伝&箱根駅伝 結果報告  
日本体育大学クリニックのご案内

## 日体大を 極める Episode 12

# 日体大生の夢

皆さんは、どのような夢をもって、日体大に入学したのだろうか？

体育教員、スポーツ指導者を志す学生は多いだろう。さらに、スポーツを通して社会に貢献する職業と捉えれば、夢は大きく広がる。日体大は、国内外を問わず、多岐にわたる領域に卒業生を輩出してきた。

去年は、大谷翔平選手の活躍が話題をさらった。野球界を支える存在として日体大にも世界で活躍する卒業生がいる。オリンピックやWBC（ワールド・ベースボール・クラシック）などに、コーチやトレーナーとして帯同している。たとえば、その一人、黒木豪氏（2008年・体育学部卒、現在は日本体育大学国際交流センターにて勤務）は、公立中学校に非常勤講師として勤務した後、JICA日系社会青年ボランティアとしてブラジルへ赴任し、少年野球チームの指導に携わった。その後、第3回WBCブラジル代表チームコーチに就任した経験をもつ。ちなみに2013年のWBCでは黒木氏のほか、日本代表チーフトレーナーとして河野徳良准教授、ドミニカ共和国コンディショニングスタッフとして百瀬喜与志氏（1995年・体育学部卒業後、中米・コスタリカ共和国にて青年海外協力隊員として活動）らが参加している。百瀬氏はその後、米大リーグ・レッドソックスでコーチに就任した。

卒業生の活躍は学報NITTAIDAIでも数多く紹介してきた。教員、スポーツビジネス、スポーツ団体はもちろんのこと、公務員、マスコミ、食品業界、旅行業界など、実社会のありとあらゆる場で、卒業生が日体大で培った力を発揮して活躍している。グローバルな時代、多くの職業が海外との接点を持っており、活躍の場は無限である。

卒業生たちが異口同音に口にするのは、日体大の人脈が大いに役立ったということだ。「スポーツが好き」という共通の価値観によって結ばれた絆が、日体大生の将来の活躍、夢を後押しする。意欲と情熱、そしてスポーツのほかにも、子ども、アウトドア、異文化、ITなど自分らしい好奇心を持っていれば、可能性を伸ばす充実した環境が用意されている。

2024年、皆さんはどのような夢を見ているだろうか。時代は、世界は、皆さんが巣立つ日を待っている。

夢を応援する日体大のサポート



学生支援センター（キャリア支援）



国際交流センター（留学・JICA海外協力隊支援）

日体大がリードする、令和の時代に相応しい学校体育の構築に向けたプロジェクトが展開されています。運動の得意・不得意にかかわらず、すべての子どもたちに運動の喜びと大切さを啓発することを目指し、情報技術を活用することで、体育授業の枠を超えて数学・情報・総合的な学習の時間との相乗効果も期待される新しい試みです。その狙いや概要、活動内容や展望について、事業実施責任者である大石健二教授に話を聞きました。



《GIGAスクール環境下における体育授業の充実》

# 「体活動強度の見える化」の効果検証

事業の狙いと概要

そして研究にかける思い

プロジェクトの背景について  
教えてください

平成28年度の閣議決定によりSociety 5.0（狩猟社会、農耕社会、工業社会、情報社会の次に訪れる新しい社会）に対応できる人材育成が求められるようになりました。その後プログラミング教育やSTEAM教育（科学、技術、工学、芸術・リベラルアーツ、数学の5領域を融合した学び）の必要性も高まったもののなかなか浸透しませんでした。しかしコロナ禍によりオンライン学習へのニーズと関心が高まり、文部科学省が取り組むGIGA（Global and Innovation Gateway for All）スクール構想が一気に進みました。その二環として、文部科学省管轄のスポーツ庁により、令和の時代に相応しい体育授業を実施すべく、体育実技においてICTを活用するプロジェクトがスタートしました。

大石先生はどのような思いでプロジェクトに取り組まれていますか

Society 5.0とは、全ての人とモノがIoT（Internet of Things）でつながり、様々な情報が共有され、今までにない新たな価値を生み出すことが可能な社会とされています。最近では、本学でもメタバース空間を活用した就活イベントを実施していますが、社会活動が劇的に変化しています。身近な変化と言えば、お金です。私の子どもころは100円硬貨などを握りしめ駄菓子屋に行きお菓子を買っていました。今は学内のコンビニでも無人化が進み、支払いはカードやQRコードが使用されています。お金で物を買うという江戸時代以前から行われていた社会のスタイルは、キャッシュレス化となり、さらにはネットショッピングにてワンクリックで物を購入する社会へと変化しました。カードやQRコードでの支払い歴やネットショッピングでの購買履歴は全てデータ化され、顧客への商品広告に活用されています。

このような時代において学校体育として子どもたちに本当に伝えるべきことは何かと考えると、私の子ども時代と同じ授業では時代に合っ

## 【介入内容】

使用機材：ウェアラブルデバイス (POLAR team pro)

＊チェストストラップにて装着

身体活動量・身体活動強度の見える化：

- ① 授業実施時：ipad によるリアルタイムフィードバック (図 2 参照)
- ② 授業実施後：データシートによるフィードバック (図 3 参照)

＊データシートはロイロノート (※ 1) を用い各個人へ配信



授業実施時のリアルタイム  
フィードバックの様子



授業実施後の  
フィードバック

(※ 1) ロイロノート…教室内でインターネットを使い、学習支援を行うアプリ



使用機材



スマートウォッチ装着の様子



授業前のデータを確認している様子



運動実施後のデータ確認の様子



授業実施のデータを確認している様子



打ち合わせの様子

2022年度

2023年度

## スポーツ庁・令和の日本型学校体育構築支援事業

# 体育授業における「身体活動量と身



大石 健二 (おおいし・けんじ)  
体育学部 教授

令和5年度に日体大で設立された(子どものからだ研究所) 研究員。日本体育大学大学院体育科学研究科博士後期課程修了。博士(体育科学)(日本体育大学)。

研究テーマは家庭環境ならびに社会環境が子どもの運動能力にあたる影響。

また、中高生の全員が私や本学の学生たちのようにどの教科よりも体育が得意だったり、好きとは思っていません。私も嫌いな教科がありましたので、体育が嫌いな生徒も一定数はいらっしゃいます。このような体育を嫌いと思っている生徒に対して今回のプロジェクトにより、今までは異なる体育の価値を共有できると考えています。体育実技はどうしても「できる」「できない」が目に見えるものです。しかし、このプロジェクトのように体育授業を通じて自分自身の生体情報を確認できることにより、生体情報に、情報技術に、数学的分析に興味関心を抱くことに繋げることができれば、体育の新たな価値を示すことができると考えています。常にこのようなことを考えながらプロジェクトに取り組んでいます。

いいと思うようになりました。文部科学省をはじめ経済産業省からも次世代型の教育としてSTEAM教育が推奨されるようになりました。さらにGIGAスクール構想により1人1台の端末環境は、現在の学校においてもスタンダードになりました。このような時代の体育授業を考えると我々が普段から使用しているスマートフォンやスマートウォッチなどを体育授業でも使用できないかと考えるようになりました。各メーカーから販売されているスマートウォッチは、スマートフォンで1日あたりの移動距離や歩数に加え、心拍数データ等の日々の活動を確認できます。学校現場において、スマートフォンの代わりとなるiPadやPC等の端末は1人1台準備されていますので、あとは身体に関わる生体情報を計測できるガジェットを体育授業で使用できれば、自分自身が実施した運動を客観的に評価できるのではないかと考えるようになりました。さらに体育授業で自分の心拍数を確認しながら運動を実施することによる経験や知識の獲得は、今後の人生において自分自身の健康管理にも役立つのではないかと考えています。

# 高校生を対象としたプロジェクトの効果検証

なぜこのプロジェクトに興味を持たれたのでしょうか

私は大学授業として「測定評価学」という授業を専門にしています。「測定評価学」が専門と伝えると「測って評価するだけでしょ」「どの分野だって測って評価している」と揶揄する人もいました。現金での商品の購入は、お金を数えるという測定をしていました。現在はキャッシュレス化によりお金を数えるという行為が無くなりつつあります。さらに防犯カメラ等でヒトを撮影すれば、人工知能を用い身長や体重も推定が可能です。学校の試験もwebテストやオンライン試験と称される試験方式を採用すれば採点も自動で実施でき教員の労働内容の改善にも役立ちます。

このような意見や社会の変化からも、ヒトが測定する行為は減少し、モノによる自動測定が増加すると考えるようになりました。さらに「測定する」という手間が省けることにより、目ごころから多くの情報を得ることが可能になります。評価が大切になるとも考えています。スマートウォッチで日々の生体情報が分ければ健康管理にも利用できます。また、日々の結果から生活習慣の改善策も考えることができます。

学校体育においてもモノが自動で測定し、自分自身の健康維持増進に役立てたいというのが私の根本的な発想です。私の個人的な考えですが、今後の教育現場において「測定」に時間やお金をかけるよりも測定値からどのように評価するかが重要であり、測定値を用いコミュニケーションを図ることが求められるのではないかと考

えています。このような思いが本プロジェクトの基になっています。

## プロジェクトの目的と内容について教えてください

全てのヒトとモノがIoTでつながる Society 5.0において、今までにない新たな体育授業としての価値を生み出すことが本プロジェクトの目的になります。

実際の内容のご紹介となると、現在に至るまでにスポーツ庁の委託事業として3つの授業介入を実施しています。

昨年度は、併設校であります日本体育大学荏原高等学校にご協力いただき、ハンドボール授業における「身体活動量と活動強度の見える化」を実施しました。授業前に生徒全員がセンサーを装着し、グラウンドにiPadを設置し心拍数データが見えるようにしておきました。授業前には心拍数データと併せ健康状況の確認を行い、心拍数の変化を確認しながらウォーミングアップを実施しました。また、ゲーム中にはゲームに出場していない生徒が出場メンバーの心拍数変化をチェックしたりしていました。授業中は可能な限り運動時間の確保を目的にあえてiPadを見る時間を設けることはしませんでした。しかし、授業終了後に生徒一人ひとりの授業中の様子をヒートマップで示し、グラウンドのどこをどのように動いていたのか、また心拍数データと移動距離と速度をグラフ化したフィードバックシートを作成しその日のうちに授業担当教員から生徒にロイロノートを用い配信してもら

2022 年度実施内容

【スポーツ庁：令和の日本型学校体育構築支援事業】  
《GIGA スクール環境下における体育授業の充実》

高校生を対象とした体育授業における「身体活動量と身体活動強度の見える化」の効果検証

### 【方法】

対象授業：ハンドボール

対象者：東京都内の私立高等学校1年生女子

対象者人数：99名（運動部所属人数：63名）

（介入前後の両アンケート実施者数81名：分析対象）

対象クラス数：介入授業3回⇒2クラス

介入授業2回⇒2クラス

介入授業1回⇒2クラス

介入授業時期：2023年1月から2月

研究デザイン：クロスオーバー試験（図1参照）

アウトカム：生徒からのアンケート回答

アンケート実施時期：

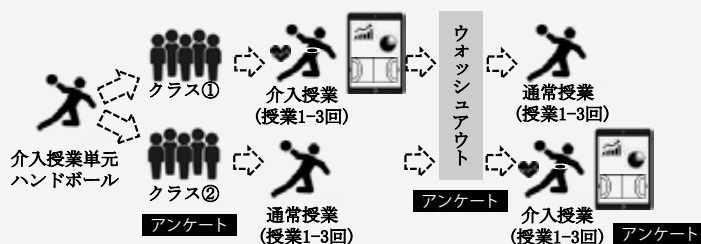
1. 介入前 (pre)
2. ウォッシュアウト時
3. 介入後 (post)

分析：介入前後 (pre/post) の比較

アンケート実施方法：google forms

アンケート調査内容：

- ・インターネット使用開始時期
- ・介入内容の必要性
- ・介入内容の有効性
- ・感想等の自由記述 等



本研究デザイン

いました（P4上部図を参照）。ちなみにですが、フィードバックシートの作成は我々が実施しました。データはクラウド上に管理するため、高校の先生方と同じデータを我々も確認することが可能です。そのため、生徒全員分のフィードバックシートは我々が作成し、生徒個人への配信を授業担当教員にお願いしました。生徒たちは、ロイロノートを用い、その日の授業の振り返りをしてもらい、次の授業の課題を考えるようにしました。私の子ども頃の体育授業といえば、「体育実技をやって終わり」ということが多かったと思います。本プロジェクト内容であれば、フィードバックシートを用いた授業の復習も予習もできます。さらに、このフィードバックシートは体育実技として実施した毎時間の移動距離等を蓄積することを可能とするため「ポートフォリオ評価」にも活用が可能と考えています。

今年度は、本学から離れた学校においても委託事業の実施可能性を検討するために兵庫県内の公立学校にて実施していただきました。自身は兵庫県内の公立学校に機材等の説明のために一度お伺いしましたが、あとは全て大学にて実施しました。データは全てクラウド管理のため、授業終了後インターネットを繋ぎデータをクラウドにアップしていただきました。データがクラウドに保存さえされれば、昨年度の日本体育大学在学高等学校と同様、我々が生徒全員分のフィードバックシートを作成し授業担当教員に配信し、授業担当教員から生徒に配信することができます。今回の兵庫県内の公立学校に実施により、全国の高等学校で実施できると実感しています。

また今年度は日本体育大学在学高等学校の持久走の授業にてスマートウォッチを装着した授業

を実施しています。持久走を速く走れるようになることも大切ですが、健康の維持増進に適した運動強度を知ることが目的に、スマートウォッチで自分自身の心拍数を確認しながら運動を実施しています。授業前には目標心拍数を確認します。授業は周回路で実施しているため、1、2周目は目標心拍数に達しているかを確認します。その後体力に余裕がある生徒は心拍数を10拍あがる速度にしてみるなど、個人の体力レベルを考慮した授業を展開できます。この授業におきまして、授業終了後には他と同じようにデータをクラウド管理し生徒全員にフィードバックシートを配信しています。

スポーツ庁からの委託事業ではありませんが、日本体育大学柏高等学校では本学の学術研究補助にて体育を主軸としたSTEAM教育の構築を目的とした授業に実証実験を実施しました。日本体育大学柏高等学校では体育授業ではなく総合的な学習（探究）の時間を一緒に実施しました。3クラスを対象に5回の授業を実施させて頂きました。1回目はSTEAM教育について、2回目はバスケットボール実施時の心拍数測定、3回目はスプレッドシートを用い2回目で得心拍数データの分析、4回目は投球とサッカーのPKの球速測定、5回目はスプレッドシートを用い4回目で得心拍数データの分析を実施しました。2回目の内容はスポーツ庁からの委託事業内容と同じです。日本体育大学柏高等学校では、体育授業で取得可能なデータを実際に生徒自身が分析し、分析結果からパフォーマンス向上に向けた課題等を考察しました。考察した内容は、ロイロノートを用い提出してもらいました。



投球速度の計測様子(4回目授業)



ウェアブルデバイスの装着練習の様子(1回目授業)



スプレッドシートを用いたデータ分析実施時の様子(5回目授業)



授業実施時のリアルタイムフィードバックの様子(2回目授業)

# 研究成果の社会への還元と日体大が担う役割

高校で実施することにはどんなメリットがありますか

コロナ以前からICT教育として小学校や中学校の体育授業ではiPadを用い、人の動きを撮影・観察し、上手い人と下手な人を比較して改善ポイントをディスカッションする授業が行われてきました。高校生でしたら、小学校や中学校と同様な撮影・観察だけでなく、次のステップとして体育をもっと科学的に捉えても良いのではと考えました。特に高校では情報の授業が必須となりましたので体育授業とデータサイエンスの組み合わせが中学との違いになるのではと考えました。

社会的に統計学が注目された時期がありました。私の学生時代は「統計学」の本といえば難しい数式と専門用語が多く難しい本の代表格でした。最近では、野球を統計学の観点で見るとではなく、統計学の説明に野球データが使用されている本が複数販売されています。高校で「統計学」は数学の分野です、確率論は多くの高校1年生で学習する内容と紹介されています。これらのことから体育授業で獲得したデータを用いた本プロジェクト内容は、中学ではなく高校で実施することが最も適した内容かと思っています。

さらにどのような展開を考えていますか

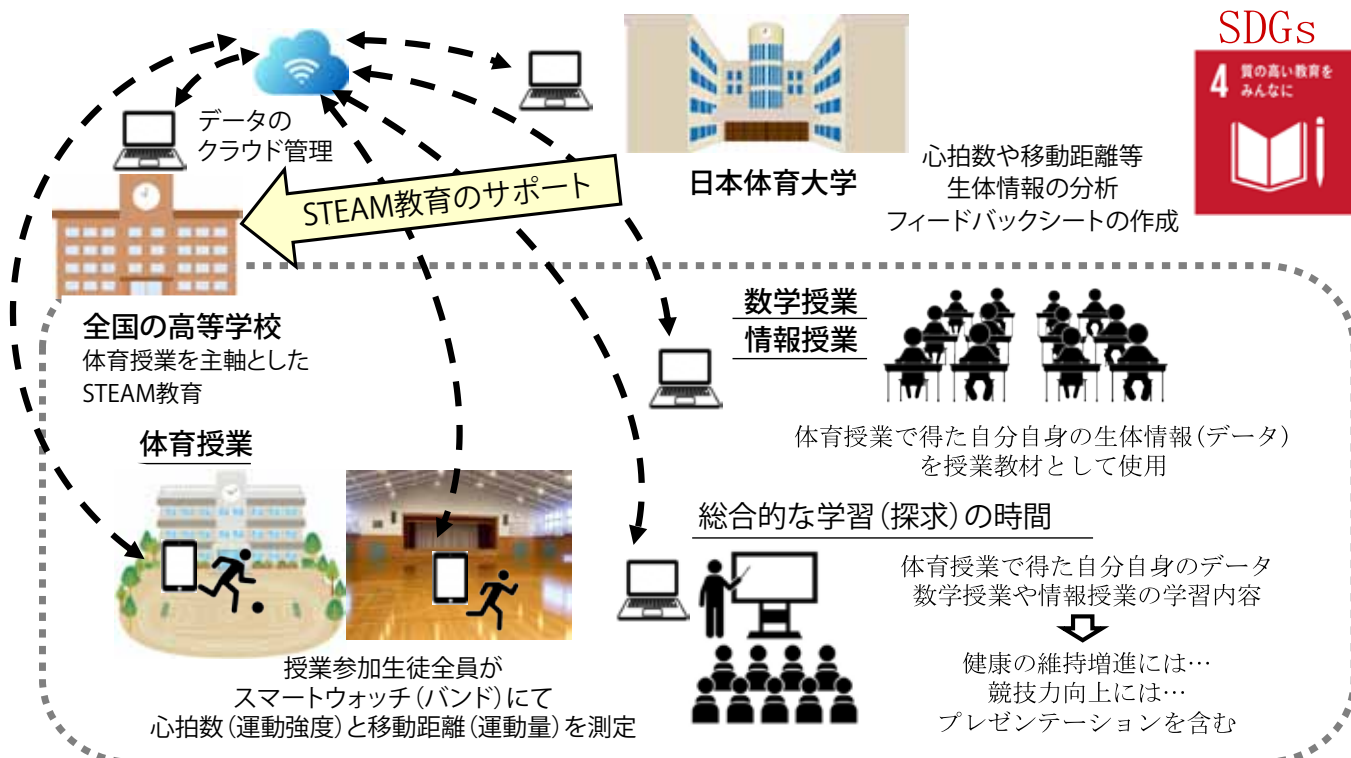
本プロジェクトは高校のご協力により実施に至っています。大変忙しい中にも関わらず、本プロジェクトを実施する機会を設けていただきました各学校の先生ならびに生徒の皆さんには感謝の気持ちでいっぱいです。

本学は、体育を教える専門家を養成することを大きな一つの目的とした大学です。多くの卒業生が体育教師として教育現場で活躍しています。私自身卒業生であり体育大学の教員という立場から少しでも教育現場にいる体育教員の役に立てればと思っています。本学卒業生の先生方もコロナ禍の体育授業は大変ご苦労されたことだと思います。

このようなことを考えますと、本学と多くの高校との連携を強固にし、お互いに助け合える連携が今後重要と考えています。本プロジェクトは全国展開が可能な内容だと思っています。そのためまずは全国の卒業生方で体育授業におけるICTの活用を検討されている先生方と一緒に、よりよい体育授業に繋がる教材研究が実施できればと思っています。

私のイメージとしては、在学生だけでなく、卒業後も教育現場で困ったことがあればすぐに相談ができたり、サポートをできる大学が未来の日本体育大学です。私自身、他大学の勤務経験があり、困った時に頼ることができる母校の恩恵を常々感じていました。感謝の気持ちを含め、母校日体大の教員として卒業生にも頼られる存在になればと思っています。

SDGs



未来の体育授業(体育を主軸としたSTEAM教育)

小中高生対象にスポーツデータを用いた夏休みの自由研究というイベントにも取り組んでいます

日体大の教育研究成果を社会に還元することを目的とした活動の中心に社会貢献推進機構があります。その取り組みの一環として本プロジェクトの内容を用いたイベントも実施しています。

午前中は、心拍数測定機器の装着方法から始まり、実際に運動中の心拍数を測定し、分析を行いました。運動といってもテレビ番組の『逃走中』のようなイメージで、日体大生がハンター役となり参加者は捕まらないように逃げてもらうという遊び感覚で楽しめる内容です。参加者には運動中ですが、ミッションと称してiPad上の自分の心拍数を確認するを行いました。運動後は1人1台パソコンを用い自分の心拍数データを分析しました。

午後は本学の図書館で調べ学習兼パソコンを用いExcel、Word、PowerPointを用い小冊子の作成を実施しました。小学校高学年4人程度に対し学生1名が対応しましたが、低学年に対してはマンツーマンでパソコンの操作方法や、関数を使った最大値や平均値の算出を一緒に実施しました。最後は、分析結果を冊子にして持ち帰ってもらいました。

研究成果をどのように社会に還元していきたいとお考えですか

スポーツ庁の委託授業としての目的は、Society 5.0における、新たな体育授業としての価値を生み出す体育授業を提案することが目的になります。その先として、多くの方に体育を好きになってもらいたいと思っています。

また、高等学校学習指導要領体育編には教科の目標として「心と体を一体としてとらえ、健康・安全や運動についての理解と運動の合理的、計画的な実践を通して、生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育てるとともに健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上を図り、明るく豊かで活力ある生活を営む態度を育てる。」と記されています。しかし、日本における成人の定期的な運動実施率は50%程度であり、政府が定める目標には到達していません。つまり、体育授業の教科目標は達していないとも考えられるため、本プロジェクト成果を成人の定期的な運動実施率向上に繋げたいと考えています。

最後に日体大生へのメッセージをお願いします

私自身学生時代を振り返ると講義授業よりも実技授業が好きでしたし、部活の友人達とスノーボードをしたりとデータサイエンスや情報に興味があったかと言えば、興味はありませんでした。数学が苦手、嫌いと思っていた方もいるかと思いますが、さらに体育大学なのに、なぜ数学や情報？と思う方もいるかと思いますが、今は、興味関心が無くても、もしかすると自分自身の生体情報を毎日確認しているとデータに興味関心を抱く可能性もあるかと思っています。少しでもICT教育やSTEAM教育に興味がある学生の皆さんと一緒に新しい体育授業の価値を考えませんか？研究室でお待ちしています。

最後に、本プロジェクトに協力していただけた高校を募集しています。全国展開も考えています。ご連絡をお待ちしています。

## 研究成果を社会へ

日本体育大学 令和5年度公開講座

# スポーツデータを用いた夏休みの自由研究

～小・中・高校生を対象としたスポーツデータ分析講座～

近年では、さまざまな競技において、データの収集・分析を基に戦略を立てることが増えており、スポーツアナリストの必要性が高まっています。本講座では、自分が運動した測定値から導き出されるデータを分析、考察して図と文章を作成、製本して持ち帰れます。スポーツデータ分析の面白さを体感するとともに、自由研究としても役立ちます！

**午前の部 測定・分析 9:00～12:00** 体育館の暖めあき運動  
●ウェアラブルデバイスを利用して運動を行い、自分の心拍数や歩数・運動距離を測定。  
●測定したデータを用いて、運動強度と心拍数の関係性をパソコン(Arrow)で分析。

**午後の部 考察・製本 13:00～16:00**  
●分析データを簡単に理解、パソコン(Arrow)で考察内容を文章化します。  
●文章と分析結果を印刷して製本。製本した成果品は持ち帰れます。

**日時** 小学生・中学生 8/5(土) 小学生・高校生 8/8(火) 小学生・中学生・高校生 8/10(木)

**会場** 東京・世田谷キャンパス 東京都世田谷区深沢7-1-1 午前：2203教室、2205教室、グラウンド 午後：同専科

**対象** 小学生・中学生・高校生 **定員** 各回20名

**受講料** 1,000円(小学生500円) **申込者** 各回20名

**申込締切** 7月26日(木)までHPより

主催/日本体育大学社会貢献推進機構 後援/世田谷区 1)世田谷区スポーツ振興財団

お問い合わせ先 日本体育大学社会貢献推進機構 スポーツプロモーション・オフィス  
本学ホームページ: <https://www.nittai.ac.jp/> Eメール: [shakoukushin@nittai.ac.jp](mailto:shakoukushin@nittai.ac.jp)  
(東京・世田谷キャンパス) 東京都世田谷区深沢7-1-1 03-5706-0911 (後援世田谷区スポーツ振興財団) 03-5706-0911  
(横浜・磯子キャンパス) 横浜市中区磯子区磯子1-271-1 045-507-1263



小学生のデータ分析の様子



中・高校生のデータ分析の様子

# スポーツの価値を最大化する スポーツマネジメント学

～限りあるリソースで新たな価値を創造し  
あらゆる課題や問題を解決するビジネススキル～

「する」「観る」「支える」などそれぞれの立場でスポーツに関わる人たちがいます。

その中でも「支える」分野は多岐に渡り、社会的ニーズは高まり活躍の場は広がりつつあります。

今回はスポーツをビジネスという切り口で捉え、政治、経済、文化、教育など様々な世界をつなぐハブ産業として、

新たな可能性を見出し、研究を続ける横田匡俊先生にお話を伺います。



## 【プロフィール】



### 横田 匡俊

(よこた まさとし)

スポーツマネジメント学部

スポーツマネジメント学科 教授

東京大学大学院教育学研究科博士課程 単位

取得後退学。修士(教育学) (東京大学)

早稲田大学スポーツ科学部助手、三菱総合研究所(スポーツ事業リーダー)を経て現職。

三菱総合研究所では、スポーツ事業リーダーとしてスポーツを通じた地域活性化、スタジアム・アリーナの収支試算、トップアスリートのタレント発掘、など多岐にわたる業務を担当。現在は様々なスポーツビジネス、スポーツ政策の現場と関わりながら教育研究活動を行っている。趣味は筋トレ、スキー、サーフィン、カクテルづくり。

## 【社会活動等】

一般社団法人スポーツウェルビーイング推進協議会「アドバイザー」/スポーツ庁「スポーツ参事官(民間スポーツ担当)付技術審査委員会」技術審査専門員/東京都「UPGRADE with TOKYO第20回」審査員(～2022・3)/東御市「東御市スポーツ推進審議会」会長/大阪商工会議所「スポーツ産業振興委員会」委員 他多数

## 横田先生からのメッセージ

マネジメントとは問題解決、つまり価値の最大化です。限られたリソースをうまく使い価値を生み出し問題を解決する。これを社会の中で仕事としてできるのは非常に楽しいものでやりがいのある仕事です。かつて何千万円も払ってコンサルを依頼してくれた顧客に「本当にありがとう。お願いしてよかった」と言われたときには、やってよかったと心底思いました。形に残る仕事ができるのも醍醐味です。例えば日本で最初にコンセッション方式というスキームを取り入れた有明アリーナの運営計画やコンサルに関わり、今でもうまく運営されているのを見ると感慨深いです。スポーツマネジメント学は、将来的にスポーツに関係してもしなくても社会で具体的に役立つ知識とスキルなので、卒業後に活躍している先輩方がたくさんいます。

# スポーツマネジメント学とは

——スポーツマネジメント学とは

どのような学問・学部でしょうか？

スポーツマネジメントの定義はいろいろあります。現在私は実務系教員として教鞭をとっていますが、長くビジネスの世界でやってきたので、自分としてはビジネススキルだと思っています。スポーツマネジメントを大雑把に説明すると「スポーツの価値を最大化すること」ですが、ビジネススキルという観点でさらに付け加えると、ビジネスの世界にはお金と時間という制約条件があるので、その中で価値を最大化しなければなりません。そういう観点でスポーツマネジメント学を捉えているので、現実にある人・物・金・情報などの制約の中でどう価値を高めていくか。それはビジネスだけではなく、政策でも地域でも文化でもどんなジャンルでも同じです。

スポーツは「する」「観る」「支える」とよく言いますが「支える」部分を特に仕事として捉えた観点でカリキュラムが作られており、学生にビジネスと関わる機会を提供するのがこの学部です。学部ができてから6年経つので、以前よりもその趣旨は伝わっていると感じます。もちろん部活をやっている、トップアスリートを目指している学生もいますが、そうではなく「やるのはあまり得意じゃないけど観るのが好き」とか「仕事としてスポーツに関わりたい」という学生が増えてきている印象です。

——社会的なニーズや将来の活躍の場に変化を感じますか？

確実に変わってきています。政府が打ち出している「日本再興戦略」の「官民戦略プロジェクト10」の中にスポー

ツ産業の市場規模を5.5兆円から15兆円にするという内容が盛り込まれています。2019年のラグビーワールドカップ、2020年（2021年に延期）のオリンピック・パラリンピック、2021年（2022年に延期）のワールドマスターズゲーム、これをゴールデンスポーツイヤーズと呼び国が成長産業に指定したという経緯があります。長いことスポーツビジネスの世界にいましたが、明らかに潮目が変わり人とお金がスポーツ市場に流れ込んできていると感じました。

——「スポーツデータ解析演習」の授業では

どのようなことに取り組んでいますか？

簡単にいうと授業の目的はデータ分析するスキルを身につけることです。データ分析はマニュアルを見れば誰でもできるのでそれ自体に大した付加価値はありません。ですから重視しているのは、仮説を立て、分析結果を踏まえ戦略を考えることです。具体的には、民間企業と連携してコンペのようなことをやっています。ライブリッツ株式会社というプロ野球のデータのマネジメントをビジネスにしている会社で、過去20年くらいの本物のデータをお借りし、分析の課題も出してもらいます。学生が実際にプロ野球のデータを分析して集客戦略などを考えパワーポイントにプレゼン資料をまとめていただきます。最後にライブリッツさんに授業に来ていただき、優秀賞を選んでもらい表彰式をしています。



## スポーツデータ解析演習

「スポーツデータ解析演習」の授業では、このようにJリーグの経営データを使うこともあります。例えば、スター選手を獲得すれば観客が本当に増えるのか？ というテーマで分析。選手の年俸の総額と順位の相関分析などをすると、J1だと年俸と順位が明らかに関係するのに対してJ3になるとあまり関係がありません。それは、トップレベルで勝つにはスター選手を獲得しないと勝てませんが、J3ぐらいのレベルだとそれ以外にいろいろな要素、例えば戦略や戦術などが絡んで順位を上げているのかもしれない、という分析をしたりしています。

# シンクタンクを経て大学教員へ

——スポーツマネジメントを専門に選んだ理由や  
経緯を教えてください

大学は体育学科を出て、その後大学院に進みました。もともとは大学の先生になりたかったんです。でもいざなってみたらちよつと違うと思ひ三菱総合研究所という民間のシンクタンクに転職。その中でスポーツ事業に長く従事しました。アカデミックな研究と違ひ、リサーチやコンサルの仕事で自分と部下の給料をとにかく稼がなくてはならない。ですから、特に専門はなく、クライアントがいてお金を払ってくれば何でもやっていました。

環境問題や都市計画のような術が違ひ仕事メインの会社の中で、スポーツはそれほど大きな事業ではなく、スポーツや健康と名のつく仕事は全部やるように言われ何でもやりました。私の専門は「問題解決」や「課題解決」だと納得させ、位置付けてやっていました。

その中で今取り組んでいるのは「ちよつと真面目に経済効果を考えようよ」という研究でしょうか。例えば、東京オリンピックの経済効果という話になると、何兆円という桁になり幅も非常にある。オリンピックが終わった後に、これを実感を持って感じられる人ついでしませんか。それついでどうなの？という疑問はシンクタンクにいた時代からあり今も本当の経済効果とは何だろうか？ということを考えながら研究しています。

——現在特に興味のあるテーマはどんなことでしょうか

経済効果の中でも、地域経済循環というテーマには力を入れています。経済波及効果というのは何かをしたときに増えた生産量を全部足したのですが、そうではなく本当

はお金を払っている人に対してどういうリターンがあったかということが大事だと思っています。地域という観点でいうと、例えばどこかの自治体がお金を出してスポーツ施設をつくったなら、出資者は自治体です。さらにいうと納税している市民が出資者です。そのときに、では地域の中にどれだけ新しいキャッシュが生まれたかが大事で、それが投資のリターンです。それをどうやって計測するかということを今やっています。

その点、北海道日本ハムファイターズの新球場（エスコンフィールドHOKKAIDO）や長崎のサッカースタジアム（NAGASAKI STADIUM CITY）は新しい形として注目しています。これまではスポーツの試合があるときだけお客さんが来て終わったら帰る、というのがスタジアムだったのですが、試合がないときにも人が集まるような仕掛けがたくさんあるんです。先日訪問した新球場では、試合がないのにお店が開いていてお客さんがコーヒーやビールを飲みながらおしゃべりしていました。子どももたくさん来ていてプレイルームで遊んだり。北海道はとくに寒く、寒さをしのげる大きな遊び場がありません中、地域のコミュニティの核になっているのがよいと思いました。



## スポーツビジネスの新しい形 エスコンフィールドHOKKAIDOを視察

ゼミでも授業でも「スポーツだけを見ないように」と言っています。なぜならスポーツ産業というのは、ハブ産業だからです。つまりスポーツだけで何かビジネスが成り立っているかという、その範囲はすごく小さく市場も狭い。でもいろんな領域と融合することで価値を広げられます。

例えば、ツーリズムやITやテクノロジーなどはかなり使われていて、ウェアブル端末をつけてスポーツする人は増えましたし、スポーツ観戦するときにARやVRのゴーグルを使ったり、ヘルスケアや健康に関するものを記録するアプリなどもあります。教育産業との融合も進んでいます。今は子どもたちのためのスポーツ教室がたくさんありますが、スポーツが上手くなるだけというよりは子どもたちの健全育成を目的にしている教室も増えました。このようにスポーツ産業はさまざまな領域と融合する真ん中にあるハブなんです。ですから、見聞を広げるためにもフィールドワークや視察はとても大切です。



# ビジネスに直結した学びとは

——スポーツマネジメント学部が目指す人材育成とは？

いまビジネスの世界で求められているのはイノベーションです。イノベーションとはiPhoneを発明するなど、つもない商品を開発することと考えがちですが、そうではありません。組織や企業が市場に適応していくための小さな変化もイノベーションなのです。

人間はゼロから1を生み出すことは絶対にできません。イノベーションは、もともとあるもの、同士の新しい組み合わせ。となると、もともとあるものをたくさん知っているほうが生み出しやすいんです。だから、いろんなことを知っているということがすごく大事で、情報収集する意識、もっというと社会に出て学ぶ続ける意欲や意識が一番大事だと思います。市場の変化に適応していくためには勉強が必要です。卒業しても勉強は続くのですから、それを学生のうちからできる人になって欲しいです。

そして、新しい組み合わせはほとんど失敗するので、失敗を恐れない人間を育てているつもりです。学ぶ意欲と失敗を恐れない姿勢を身につけてくれたら嬉しいですね。それはスポーツの領域に限られません。2023年4月にトヨタの社長が変わりましたが、そのときに前社長が「もうトヨタは車屋じゃない」と言ったのは象徴的でした。世界のトヨタだつていつまでも車を作り続けるだけだつたら潰れます。勉強して、新しいことをして、どんどん生み出していかなきゃいけないわけです。学び続けることが一番大事！

——スポーツビジネスを将来の進路に考えている学生が日ごろ心がけておきたいことは？

学び続けることと同時に、好きなことや得意なことをや

るといふのもすごく大事だと思います。そのほうがやる気も出るし、結局は効率がいいのです。高校生だつたら本当にスポーツを楽しんで欲しいし好きになって欲しい。本当に熱中して打ち込むという経験が、将来かけがえのないエネルギーを生み出すことになると思います。

とはいえ好きなものが見つからない学生はとも多いですよ。でもやっているうちに好きになることもあると思います。好きなことがないからダメではなく、探さないと何もできないということもない。やってみるうちに仕事自体を好きになるかもしれないし、一緒に働いている人を好きになるかもしれない。好きになり方はいろいろある。見つからなければ、とりあえずやってみればいいのです。特に今の大学生は、新卒で入った会社到最后までいる人なんてほとんどいません。繰り返しますが、まずやってみて、いつでも学び続けることが大事です。



東御市の花岡市長(中央)



## ゼミ合宿 長野県東御市



地域経済循環研究の一環としてゼミ合宿で年に2回現地調査に訪れる長野県東御市。市役所の方に直面している課題を聞いたり、スポーツ施設や観光拠点などを見学したりします。夏合宿のあとの後期授業では4~5人のグループに分かれ、どうやってスポーツを活用しつつ東御市を盛り上げられるか事業提案を考えます。3月にもう一度市を訪れ、学生たちが市長にプレゼンし、市長賞やすぐに実行可能な提案を選んでもらいます。実際に提案をもとにイベントを開催したこともあります。

日体大の学生は競争が好きなので、コンペ形式だと非常にやる気になるしエネルギーも生まれます。提案する際には「必ず一次情報を取ってください」と指導しています。これまでの例でいえば、観光活性化のためには電動アシスト付きシェアバイクが必要と提案するのなら、どうやったらそれを実現できるのか具体的な方法も一緒に提案しなさいと。そのためにはシェアサイクルの会社に電話してヒアリングする必要があります。最初は「会社に電話とか無理です」なんて言う学生もいますが、最終的にはちゃんと動く。そういう行動力が日体大生の強みだと思います。

# する JICA 海外協力隊セミナー

日体大は国際貢献活動の一環として、JICA海外協力隊への人材輩出を推進しています。本学生はもとより、広くJICA海外協力隊について理解を深めてもらうため、昨年12月10日（日）のオープンキャンパスにおいて、特別企画として「JICA海外協力隊セミナー」を開催しました。

セミナーでは、公益社団法人 青年海外協力協会の原浩治氏、本学卒業生でJICA海外協力隊として活躍された三上り香氏により活動の概要や魅力を紹介していただきました。海外での活動に関心をもつ参加者にとって、第一歩を踏み出す契機となったことでしょう。



公益社団法人 青年海外協力協会  
(JAPAN OVERSEAS COOPERATIVE ASSOCIATION)  
グローバル推進グループ 協力隊募集支援 総括主任

原 浩治氏

## 日体大の皆さんに期待



現在、多くの開発途上国から、体育・水泳・空手・柔道など各種スポーツ分野における協力隊員の派遣が求められています。そこで、スポーツ文化学部(スポーツ国際学科・武道教育学科)のご協力によりお時間をいただき、1時間半程度のセミナーを実施しています。

一般向けには春と秋に募集説明会を開いており、そこに関心のある人に来てもらう形を取っています。それとは別に、大学や専門学校に我々が向いて、分野や専攻に合わせた説明や、卒業生などの体験談を聞いてもらうのが、この協力隊セミナーです。

協力隊セミナーは、スポーツ文化学部における授業の一環として行われます。そのためセミナーへの参加は任意ではなく、履修した方には皆さん、出席をいただいております。

学生の皆さんがいま取り組んでいるそれぞれのスポーツで国際協力に参加することができます。多くの方に興味をもっていただき、一緒に活動ができることを楽しみにしています。

## JICA海外協力隊

JICA海外協力隊は、日本政府ODA（政府開発援助）予算により、独立行政法人国際協力機構（JICA）が実施しています。開発途上国からの要請に基づき、それに見合った技術・知識・経験を持ち、「開発途上国の人々のために生かしたい」と望む方を募集し、選考、訓練を経て派遣します。

本学ではこの事業を通して、開発途上国における体育・スポーツの普及・振興を図るとともに、大学の知見を有効に活用することで、国際協力分野における人材を育成することを目的としています。これまで、日体大は587名（大学院・短大卒含む）を開発途上国へ派遣してきました。「スポーツのもつ様々な『力』を活用して、国際平和の実現に寄与する」使命を果たすよう、これからも取り組んで参ります。

# 世界へ踏み出すその一步を後押し

## JICA 海外協力隊という魅力ある挑戦の舞台



三上 るり香氏

体育学部健康学科卒。2015年から2018年までJICA海外協力隊（体育隊員）として活動。現在は高校で体育教師をしながらエルサルバドルの経験談や国際・異文化理解などを生徒や先生方に伝えている。

### — JICA 海外協力隊との接点は？

教育実習に行った時、今の自分の能力で本当に教員をやれるのか？と不安になりました。また、初めて日本の教育現場を目の当たりにして、私なりにモヤモヤがあったんです。そこで漠然と「海外では体育がどのように行われ、どう教育として成り立っているのか？」自分の目で見てみたいと思いました。そこで巡り合ったのがJICA海外協力隊です。

でも海外で生活した経験もないのにいきなり行くのは怖かったです。まずはカナダにワーキングホリデーに行きました。すると、とても気持ちの良い場所で、外国人と働くのが楽しいと思えたので、JICA海外協力隊にもチャレンジしようと思ったのです。

### — 赴任先は？

エルサルバドルという中米の国です。私は体育の職種で派遣されたのですが、実際の要請内容が「障害がある人たちにスポーツの技術的な指導をして欲しい」というものでした。そして、配属先を見たら現地のパラリンピック委員会だったのです。「えっ、私、体育をやりたいくて行くのに、この要請って体育なの？」、

いきなり壁にぶつかりました。

最初は陸上や水泳を現地の人に教えましたが、専門知識が必要なことやさまざまな障害がある人がいて指導は本当に大変でした。しかし、視覚障害者の伴走者を務めたり、その他種目の指導（ボッチャやゴールボール）、国際大会の同行・サポート、指導者向けの研修実施、シッティングバレーボール新種目の取入れ（障害者を探すところから指導まで）など、赴任先で力になれることを全力で取り組みました。



### — 自分なりにチャレンジしたことは？

私の目標は現地の体育を見ることでしたが、自分のやれることや協力できることがあれば、やはり何でもやりたいという気持ちでした。最終的には、配属先の許可を得ながら、特別支援学校で体育指導、小学校から高校までの普通校で体育指導、夏休みにはダンス教室を開催し、発表会をするなど、

JICAの要請内容以上に他の分野も開発していきました。

そして活動の集大成として、「障害者と健常者の壁を少しでもなくしたい」という思いから一緒にスポーツを楽しむ機会として日本式の運動会を開催しました。自分で新しく競技も考えました。

目が見えない、体が不自由など、障害があると出来ない種目もあります。その中で出来ることを考え、作るというのが、私の最後の半年をかけた大きなイベントになりました。結果は大成功で、皆さんから「素晴らしい！こんなの見たことない！」と言われるくらい好評でした。パラリンピックの担当は最初は想定外でしたが、そこに携われたからこそ経験できたことや気付かされたことがたくさんありました。



### — 語学で大変だったことは？

カナダで英語には慣れていた、現地はスペイン語圏だったので、着任したらすぐにスペイン語に脳がシフトしました。語学は心配ないと皆さんに伝えたいです。最初のTOEIC® 330点は自分で勉強するしかありませんが、普通に準備すればクリアできます。その後はJICAが手厚くサポートしてくれます。

### — 帰国後に活かされたことは？

1年目は臨時免許を得て、小学校で教員をやりました。その間に教員採用試験を受け、今は横浜市の高校で教員をしています。そこで体育を教えつつ、総合の授業で国際理解教育やキャリアデザインの担当をしています。国際教育やコミュニケーションの話をする時に、JICAでの経験が活かしています。

### — 今後の目標は？

多様性や多文化理解、コミュニケーション能力などを重視した学校現場を作りたいです。生き方に悩んでモヤモヤしている高校生や大学生はたくさんいると思うのです。その中で自分が幸せを掴むため、どう生きていくのが良いのかを自分で考えられる学生になって欲しい。そこで私の経験がヒントになり、視野が広がったり、背中を押したりするきっかけになれば嬉しいです。



# 2023(令和5)年度 学校・部活動における 重大事件・事故から学ぶ研修会

～日本体育大学が「超本気」で取り組み続けている「命の授業」～

人々に喜びと命の輝きを与えるはずのスポーツが、不幸な事件や事故の原因となってしまうことがある。

特にスポーツ指導者・教員を目指す学生は、行き過ぎた指導や配慮を欠いた指導の危険性を肝に銘じておかなければならない。

児童・生徒の立場に立ち、命を守る指導をするためには、正しい知識が必須である。

教育やスポーツ現場の危機管理を啓発する研修会の概要と、私たちが心がけるべきことについて、学校事故や体罰、安全指導を専門的に研究する南部さおり教授に伺った。



## <ご登壇者>

私立博多高校剣道部 生徒自死事件ご遺族

2020年8月、剣道部に所属する1年生の侑夏さんが「部活が死にたい原因」などと書き残して自死しました。当時の剣道部顧問は、特待生で入学した侑夏さんに対し「やる気がない」などといってひととき厳しくあたり、日常的に痛みを与える稽古をしたり、暴言を吐くなどしていました。侑夏さんのお母様が、指導者の卵である日体大生に伝えたいメッセージを語って下さいました。

一般社団法人「ここから未来」代表理事・「指導死」ご遺族 大貫隆志さん

2000年、当時中学2年生だった次男の陵平君が、教師からの過剰な叱責を原因として、自死しました。以降、陵平君の死の理由を追い求めるうち、同じように学校での指導によって追い詰められ、死を選んだ子どもたちが少なくないことに気付き、このような問題を「指導死」と名付けました。教師を目指す皆さんに、生徒を追い詰める指導をしないよう、心から訴えました。

## <研修会概要>

学校事故対応分野の第一線で活躍する専門家や、実際の事件・事故に遭った当事者の方々を招きし、講話をいただく研修会です。スポーツ指導者・教員としての安全配慮や適切な指導方法を学ぶ一助とすることを目的としています。



— 2023年度第2回研修会を振り返って —

学内外から200名を超える参加者があり、学外参加者の属性は他大学の教員及び学生、中高の教員及び生徒、日体大OB・OG、スポーツ・教育関係者、日体大保護者会、メディア関係者など多岐にわたっています。こ

— 「学校・部活動における重大事故から学ぶ研修会」とは —

2016年度から、コロナによる活動制限期間を除き毎年開催しており、今回で15回目になります。これまでの研修会では、広く学校管理下で起きた、体罰や熱中症事故、心臓性突然死やスポーツ固有の重大事故、いじめ自殺や指導死の問題などのテーマで開催しています。

南部 さおり (なんぶ さおり)  
スポーツ文化学部 武道教育学科 教授

主な研究内容：児童虐待、体罰、部活動の安全指導、学校事故、少年非行  
所属学会：日本スポーツ法学会、日本子ども虐待ネグレクト防止ネットワーク、日本犯罪学会、日本被害者学会、日本法医学学会、日本法社会学会



## 当事者の声に耳を傾け、心に刻み、固く決意する 日体大生は必ず受講して欲しい研修会



の研修会のために、県外から毎年参加して下さっているスポーツ・教育関係者も多く、非常に意義のある研修会であり、ずっと続けて欲しい、毎年参加したいとの声も多く届いています。

### — 研修会のねらい —

この研修会では、偉い先生ではなく、実際にわが子を部活動などの学校管理下で亡くしたご遺族などの「当事者」に語って頂いています。当事者による、学校事故・事件の実態についての「自らの経験」を聞く時、聞き手はそこに自分や家族の姿を重ね、当事者の経験を追体験します。その体験の中で被害者とともに痛みを感じ、涙を流し、責任を認めようとし、指導者や学校に対して、怒りを持ちます。そしてその強烈な体験によって、「絶対に体罰・ハラスメント指導をしない」「他の指導者がやっていたら全力で止める」「生徒のことを一番に考え、生徒の命と健康を守る指導をする」「事故が起きないようにしたい。そしてもし起きてしまった時には、学校や教員を守るのではなく、とにかく被害者や保護者に対して



誠実に対応するように心がける」などと、固く決意することになります。

事故の犠牲になつてしまう生徒、そしてその家族の立場になること。「自分が指導者だったら」と想像すること。これができた学生は、間違いなく指導者になった時、様々なバックグラウンドを持った生徒たちと真剣に向き合い、対話し、安全に導くような人材になってくれるものと信じています。

なお、研修会実施の詳しい経緯については拙著『反体罰宣言—日本体育大学が超本気で取り組んだ命の授業』（春陽堂書店、2019年）に書きましたので、ご一読頂ければ幸いです。

### — 事故・トラブルを防ぐヒント —

日体大生は身体能力が高く、まさに「スポーツエリート」として学生時代を過ごしてきたことと思います。そして多くのスポーツ事故は、「できてあたり前」「これくらい大したことではない」「勝手にやらせておいて大丈夫」などという慢心によって引き起こされています。いまの生徒たちの身体能力は本当に多様であり、子どもの頃から

たくさんの方のスポーツ経験のある子、二つのスポーツのみに特化してきた子、ほとんどスポーツらしいことをしたことがない子など、様々な子どもが体育授業や部活動で同じ運動機会を得ることになります。

どうか、生徒一人一人をよく見て、たくさんコミュニケーションをとって、それぞれの個性や能力を正しく把握するようにして下さい。そして、個々の生徒の能力やニーズに合わせた指導を行い、常に生徒の意見に耳を傾け、怪我や体調不良の際には躊躇なく休ませる、たとえ大切な試合が控えていたとしても、絶対に無理をさせないことを心がけて下さい。

この研修会では、教員や指導者の「無知」や「慢心」によって引き起こされた事件・事故の実例を当事者が語ってくれます。大学での授業では気付けないこと、生徒のこころからだを守る指導のあり方などについて、多くを学ぶことができます。日体大生であれば、必ず受講して欲しい研修会ですので、是非一人でも多くの学生たちに参加して頂きたいと願っています。





# Power of Sports

## 令和5年度 日本体育大学 「第60回 体育研究発表実演会」を開催



2023年11月15日(水)、横浜アリーナにおいて「第60回体育研究発表実演会」が開催されました。

来場者を魅了するダイナミックかつ華やかな演技の数々に、  
日体大とスポーツの力を実感するイベントでした。その感動と迫力を写真で再現します。

プログラム(50音順表記)／アルティメット／エッサッサ／剣道／集団行動／少林寺拳法  
新体操／ソングリーディング／体操／チアリーダー／ハンドボール





# 第56回 日体フェスティバル2023 日体大の頂点を極めた3日間

2023年11月3日(金)・4日(土)・5日(日)、東京・世田谷キャンパスにおいて、「第56回日体フェスティバル2023」が開催されました。メインステージでの人気企画、熱い戦いが繰り広げられた学友会体育祭、部活動が個性を競った模擬店など、日体大ならではのプログラムが展開され、コロナ禍を吹き飛ばすパワーが溢れた3日間でした。



令和6年能登半島地震の発災を受けて

2024年1月1日に発生しました令和6年能登半島地震において被災された皆さまに、心よりお見舞い申し上げます。依然として予断を許さない状況が続いていますが、被災地域の皆さまの安全確保、そして一日も早い復旧・復興を心よりお祈り申し上げます。

本学においては、災害救助法が適用された市町村の学生へ安否確認等のメールを発出した上で、特に被害が甚大である地域を出身地とする学生に対しては、電話連絡を含め、状況の把握に努めたところです。大学からの安否確認にご協力をいただいた学生、大学院生、ご家族の皆さまに深く感謝申し上げます。

令和6年能登半島地震の医療支援について

2024年1月6日、救急医療学科の教員5名は、公益社団法人全日本病院協会AMAT（全日本病院医療支援班：All Japan Hospital Medical Assistance Team）の日本医科大学・日本体育大学合同チーム（3次隊）として、救急車で被災地支援に向かいました。

【派遣隊員】

小川理郎教授（医師）／横田裕行教授（医師）／鈴木健介准教授（救急救命士）／小倉勝弘教員（救急救命士）／三橋正典教員（救急救命士）

news & topics



富士山女子駅伝&箱根駅伝 結果報告

富士山女子駅伝で過去最高となる2位の好結果

2023年を締めくくるにふさわしい見事な襷リレーでした。沿道での応援にご協力いただきました同窓会、保護者会、関係者の皆様におかれましては最後までご声援いただきありがとうございました。

選手の皆様、本当にお疲れ様でした。

2023 全日本大学女子選抜駅伝競争

|    | 名前    | 個人タイム | 総合タイム   | 順位   |
|----|-------|-------|---------|------|
| 1区 | 齋藤 みう | 13'04 | 13'04   | 区間2位 |
| 2区 | 尾方 唯莉 | 21'18 | 34'22   | 区間5位 |
| 3区 | 田中 希実 | 10'26 | 44'48   | 区間8位 |
| 4区 | 柳井 桜子 | 14'41 | 59'29   | 区間9位 |
| 5区 | 山崎 りさ | 34'50 | 1'34'19 | 区間3位 |
| 6区 | 嶋田 桃子 | 19'56 | 1'54'15 | 区間3位 |
| 7区 | 保坂 晴子 | 29'49 | 2'24'04 | 区間2位 |



箱根駅伝の応援ありがとうございました

第100回東京箱根間往復大学駅伝競争

|      | 順位  | 記録        |
|------|-----|-----------|
| 総合成績 | 16位 | 11時間6分30秒 |
| 往路成績 | 21位 | 5時間35分35秒 |
| 復路成績 | 11位 | 5時間30分55秒 |

日本体育大学クリニックのご案内

### 日本体育大学クリニック

■診療時間・診療科

| 受付開始 14:30 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土・日 |
|------------|---|---|---|---|---|-----|
| 15:00      | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 休診  |
| 18:00      | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |     |
| 18:00      | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |     |
| 18:00      | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |     |

■診療スタッフ

|    |                   |
|----|-------------------|
| 院長 | 横田 裕行             |
| 医師 | 平沼 憲治 (整形外科・外科)   |
|    | 橋本 俊彦 (整形外科)      |
|    | 清水 勇樹 (整形外科・専門外来) |
|    | 林 英俊 (整形外科)       |
|    | 橋本 典生 (内科)        |
|    | 川上 康彦 (内科)        |

※上記休業日の他、以下の休業あり

1. 夏季休業 (8月中に1週間)
2. 開学記念日 (9/20)
3. 冬季休業 (12/28~1/5)
4. その他本学の諸行事等に伴う臨時休業

2018年12月に開院した日本体育大学クリニックでは、スポーツ選手の怪我の治療、予防・アドバイスはもちろん、本学学生・関係者をはじめ、地域住民の方々も対象に、スポーツに起因しない怪我や病気の診断・治療も行っています。



【所在地】 〒158-8508 東京都世田谷区深沢 7-1-1  
日本体育大学東京・世田谷キャンパス教育研究棟G階  
TEL：03-5706-0929 FAX：03-5706-0938